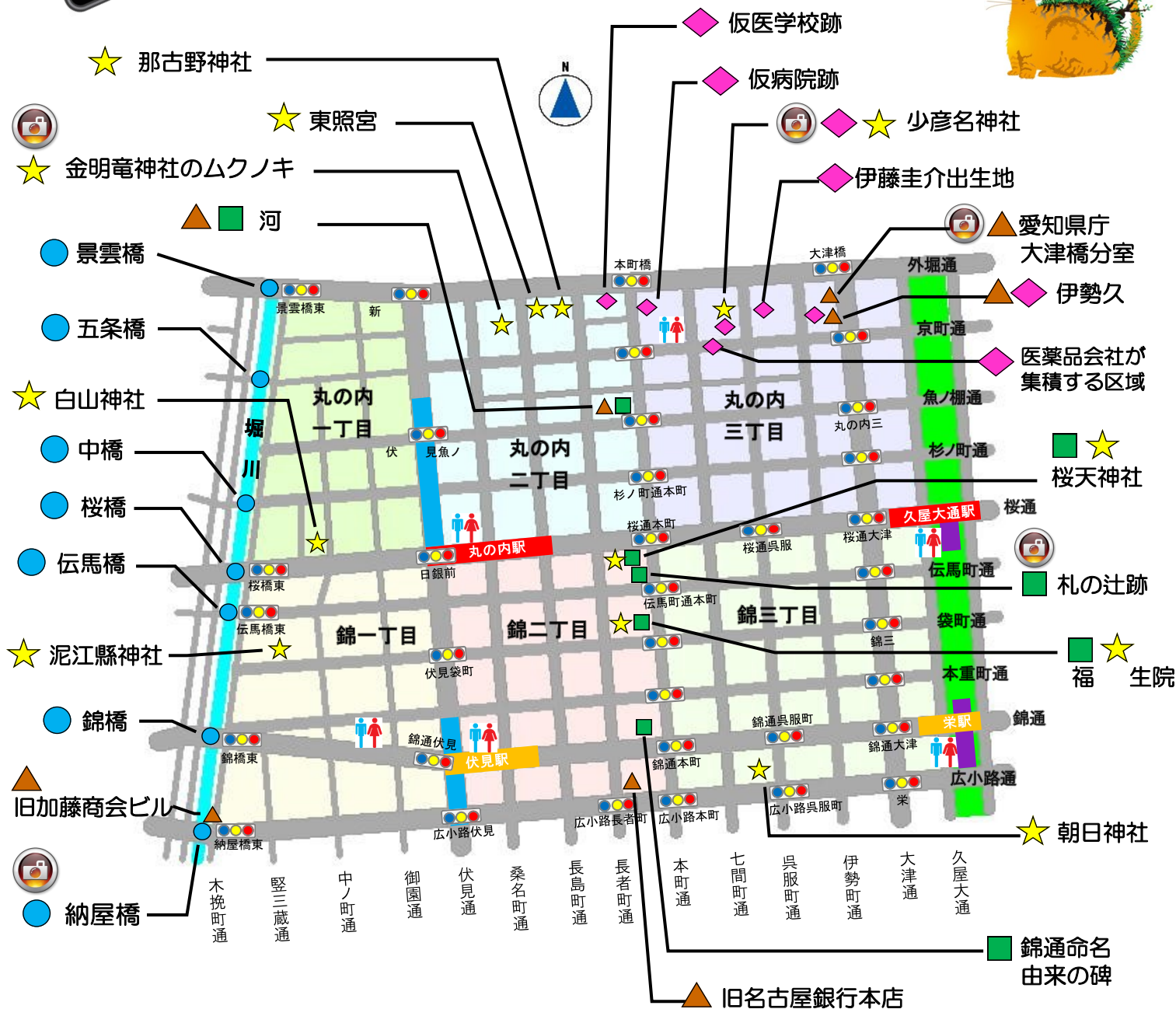


碁盤割地区スマホdeまちあるき 見どころマップ



- 堀川・橋ものがたりコース
- 江戸時代のメインストリートコース
- ★ パワースポットコース
- ▲ 立派な建物コース
- ◆ 医薬ゆかりの地コース
- チェックポイント
- トイレ



チェックポイント

- スマートフォンをお持ちの方は、下記の5カ所でナビのスタンプを取得してください。
- スマートフォンをお持ちでない方は、下記の5カ所で写真を撮影してください。
- いずれも普通に見学できる場所にあります。



①納屋橋
(東側橋名板)



②札の辻跡
(モニュメント)



③金明電神社のムクノキ
(ムクノキ)



④愛知県庁大津橋分室
(建物)



⑤少彦名神社
(社殿)

見どころ案内

堀川・橋ものがたりコース

堀川は、名古屋城下と熱田の海を結ぶ運河として徳川家康の命で慶長15年(1610)、福島正則により開削されました。昔の堀川端に思いをはせていただけるコースです。

● 景雲橋

大正2年(1913)に名古屋城が離宮となり、名古屋停車場と離宮を結ぶ新しい道路が敷設された際、堀川に架けられた橋で、現在の橋は、戦後の道路拡幅によって新しく架け替えられたものです。景雲という名前の由来は、孝経(こうきょう)の「王者徳至二山陵一則景雲出」と、晋書(しんじょ)の「景雲太平之応」からとったものと言われています。

● 五条橋

かつて清洲城下の五条川に架けられていた橋を、慶長15年(1610)に始まった清須越しの際に、この地に移築したものです。そのため五条橋の擬宝珠(ぎぼし)には、堀川が開削された慶長15年より古い慶長7年の銘が確認できます(レプリカ。本物は名古屋城で保管されています)。もとは木橋でしたが、昭和13年(1938)にコンクリート製に架け替えられました。御影石の親柱、高欄、擬宝珠、石張舗装などの特徴があります。

● 中橋

名古屋城の築城の際、堀川が開削されたときに架けられた橋で、五条橋と伝馬橋の中間にあったことから、中橋と名付けられたと言われています。現在の橋は、堀川に架かる現存する橋のなかでもっとも古く、大正6年(1917)に造られました。建設当時の華奢な鋼製橋脚、石積橋台などが残る貴重な橋です。平成26年(2014)には欄干や舗装等が改修されました。

● 桜橋

名古屋駅の正面から東へ延びる桜通に架けられた橋で、昭和12年(1937)の名古屋汎太平洋平和博覧会開催時に桜通開通とともに架橋されました。石積風のアーチ橋で、桜橋の名のとおりに、親柱や橋灯、高欄などに桜をモチーフにした装飾が施されています。

● 伝馬橋

東海道・宮の宿と中山道・垂井宿を結んだ美濃路に架かる橋で、五条橋とともに清須越しの際に移築したものと言われています。現在の橋は、大正9年(1920)に架け替えられたもので、中部地方で最古期のRCアーチ橋です。

● 錦橋

地下鉄東山線(昭和32年(1957)名古屋～栄間開通)を通すために造られた錦通に架かる橋で、堀川に架かる橋のなかでは桜橋・納屋橋などとともに最も交通量が多く重要な橋となっています。

● 納屋橋

名古屋城の築城の際、堀川が開削されたときに架けられた橋で、付近の地名をとってこの名が付けられたと言われています。その後、幾度か架け替えられ、大正2年(1913)に鋼製のアーチ橋に改築されました。欄干の中央には堀川開削の総奉行・福島正則の紋所があり、両脇には郷土の三英傑である織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の紋所が飾られています。

江戸時代のメインストリートコース

名古屋城から南に伸びる本町通は、城下町を南北に貫く碁盤割の中心の大通りでした。当時の賑わいの名残を感じながら巡るコースです。

■ 河文

寛永年間(1624～1645)に河内屋文左衛門が創業した料亭です。江戸時代には尾張徳川家御用達として利用され、明治時代には伊藤博文など総理経験者も訪れたと言われており、博文の書が掛軸として残されています。平成17年(2005)には、主屋、表門・堀・脇門、新用亭・渡り廊下、用々亭、厨房が国登録有形文化財に登録されています。

■ 桜天神社

菅原道真公への信仰があつかった織田信長の父・信秀が那古野城の中に祠を設け、道真の木像を祀ったのが始まりとされ、天文7年(1538)に現在地に移されました。この地は桜の名所で多くの桜の大樹があつたことから「櫻天満宮」、「桜天神」と呼ばれるようになりました。桜の大樹は万治3年(1660)の万治の大火で焼失しましたが、桜天神の名前は残り、やがて現在の桜通の由来となったと言われています。

■ 札の辻跡

慶長18年(1613)、本町通伝馬町筋の交差点に、荷物の運搬に必要な人馬の取次所である伝馬会所が設けられました。寛文5年(1665)には、名古屋と江戸の間の書状物品の定期輸送を行うため、飛脚会所も設置されました。この地点は名古屋の中心となっており、名古屋からまたは名古屋への距離はここを基準点として測定しました。正保元年(1644)には、法度・掟書などを記した高札を掲げる高札場も交差点の東南角に設けられ、これにちなみ、この地点を札の辻と呼んだと言われています。

■ 福生院(ふくしょういん)

至徳3年(1386)、開山順誉上人(かいざんじゅんよしょうにん)が大聖歓喜天(だいしょうかんぎてん)を奉るための堂宇を愛知郡中村の里に建立したのが始まりとされています。後に清須越しに伴い、元和3年(1617)に現在地に移転。袋町筋(現在の袋町通)にあることから「袋町お聖天」と呼ばれています。

■ 錦通命名由来の碑

『見わたせば 柳桜をこきまぜて 都ぞ春の錦なりける』

素性法師 古今和歌集

錦通の名称の由来は、上の古歌の柳を広小路通南の柳葉師の「柳」に、桜を桜通の「桜」に見立て、下の句のうちの「錦なりける」から錦通の名を命名したとされています。

パワースポットコース

基盤割地区には数多くの寺社仏閣があります。由緒ある寺社、パワースポットなどを巡るコースです。

★ 少彦名神社(すくなひこなじんじゃ)

祭神である少彦名命と大国主命(おおくにぬしのみこと)は、全国を巡り、国土開発や病気治療、医薬の普及など多くの業績を残したとされています。その古事により、二柱の神様が医薬の祖「薬祖神(やくそしん)」として祀られています。「薬と健康の神様」を祀る神社として、「無病息災」、「病気快癒」を祈願するための数少ない神社であることから、健康と病気回復を願う人の参拝が多く、今でも付近には薬を扱う会社が集まっています。大国主命が丸裸にされた白兔の体を蒲の穂で治療を施し快癒した「因幡の白兔伝説」にちなみ、幸運を招く「福兔」を社の象徴としています。社殿建立は、大正4年(1915)。

★ 那古野神社(なごやじんじゃ)

延喜11年(911)の創建と言われ、素盞鳴尊(すさのおのみこと)を祭神としています。古くは天王社又は亀尾(かめのお)天王社と呼ばれ、城内三の丸にありました。慶長15年(1610)名古屋城築城の際、徳川家康が御神籤(おみくじ)でもって神意を伺ったところ、遷座不可と出たため、そのまま城内に留まり、城の鎮守神、名古屋の氏神として祀られました。明治9年(1876)現在地に移され、明治32年に那古野神社と改称されました。

★ 東照宮

東照宮は元和5年(1619)、尾張藩祖義直が、父・家康の霊を祀るため名古屋城三の丸に創建し、明治9年(1876)にこの地に移されましたが、昭和20年(1945)に戦災により焼失しました。現在の社殿は、義直の正室高原院の霊廟で、慶安4年(1651)に万松寺に建てられたものを昭和28年に東照宮社殿として移築したものです。県指定文化財。名古屋市都市景観重要建築物。

★ 金明竜神社(きんめいりゅうじんじゃ)のムクノキ

東照宮の西隣にある金明竜神社のご神木。推定樹齢約400年、名古屋城築城前からのもので、幹回り5メートルを越える

見事な巨木であり、枝張り南北14メートル、東西18メートル、樹高は21メートル余に達します。

★ 白山神社

祭神は菊理媛命(くくりひめのみこと)。創建は明らかではありませんが、加賀国(石川県)の白山比咩神(しらやまひめのかみ)を勧請したのが始まりと言われています。応永・永禄の頃(1394～1569)は、泥江縣神社(広井八幡宮)の境内続きの末社でしたが、慶長の検地の際、境内が二分されました。昭和12年(1937)の桜通の開通により境内地は大幅に減少し、昭和39年に現在地に移りました。

★ 泥江縣神社(ひじえあがたじんじゃ)

祭神は応神天皇・神功皇后と三女神。尾張本国帳には「泥江縣天神」とあります。貞観元年(895)に豊前国宇佐(大分県宇佐市)の八幡宮の分霊として勧請したと言われています。当時は、八丁四方の広大な社域を有しましたが、慶長の検地・町割、戦後の道路整備等で減少してきました。天正の頃(1573～1593)から広井八幡宮と呼ばれ、藩主を始め広く民衆の崇敬を集めたと言われています。

★ 朝日神社

祭神は天照大神(あまてらすおおみかみ)と天児屋根命(あめのこやねのみこと)。慶長16年(1611)清須越しに伴って、伊勢神宮の神領地であった清洲城下の朝日村から、城下町基盤割の守護神として氏子とともに現在地に移ったと言われています。広小路通に面して立つ透垣(すいがい)は、向かい側にあった尾張藩牢屋の「不浄除け」の名残として珍しいものです。

★ 福生院 (■ 前述)

★ 桜天神社 (■ 前述)

立派な建物コース

歴史的有形文化財などの昭和初期に建てられた建物の建築様式とその歴史的背景を楽しむことができるコースです。

▲ 愛知県庁大津橋分室

このビルは昭和8年(1933)に造られ、戦前は愛知県信用組合連合会、戦後は農林会館として使用されました。昭和32年に愛知県に寄贈され、今も県庁の分室として使用されています。角に建つ塔状の階段室が特徴的で、ゴシック風付け柱が高さを強調しています。鉄筋コンクリート造3階建て、地下1階。終戦から70年となる平成27年8月からは、戦争に関する資料の展示を1階で行う予定。

▲ 伊勢久

宝暦8年(1758)に「伊勢屋久兵衛」の屋号で創業した薬種問屋が発祥の伊勢久(株)の本社社屋で、昭和5年(1930)竣工の建物です。建物の特徴は正面外観にあり、1階の腰部は石張り、2、3階の壁面は茶系タイル貼り、2、3階窓回りには螺旋系の溝を切った柱が4本あり、その上部飾りは変形アーチと壺がついています。

▲ 旧加藤商会ビル

昭和6年(1931)頃に貿易商を営む加藤商会の本社ビルとして建てられました。戦前は建物内にシャム国(現在のタイ王国)の領事館が置かれていたこともあります。その後、所有者が変わり、事務所や倉庫として使われたり、ビル全体が広告塔となっていたこともあります。平成12年(2000)に名古屋市の所有となり、平成13年4月に国の登録有形文化財となりました。テラコッタ(柱頭飾り)、外壁のレンガ調タイルやレリーフ模様が特徴的です。地下1階には、堀川の環境・歴史・文化に関する情報等の集積や展示を行うための堀川ギャラリーがあります。

▲ 旧名古屋銀行本店

旧名古屋銀行(旧東海銀行の前身)の本店として、広小路通に面して昭和元年(1926)に建てられました。4階分の巨大な6本の列柱が大きな特徴となっています。この列柱は古代ギリシャ建築のコリント式で、ギリシャの国花アカンサスの葉がかたどられた柱頭が特徴的です。名古屋市都市景観重要建築物。

▲ 河文 (■ 前述)

医薬ゆかりの地コース

医薬品会社が集積する区域や医薬の普及、医学の進歩等の功績の跡を巡るコースです。

◆ 医薬品会社が集積する区域

京町通の七間町より伊勢町までの間の区域は、清須越し当時の呉服物の商店が並ぶ町から、大坂の道修町に匹敵する薬屋の町へと変貌した区域です。代表的な薬種商としては、長崎から直接唐物の薬を仕入れ、販売していた生田治郎八、今川義元の家で代々伝わる今川赤龍丹を販売していた日野屋六左衛門などで、今でも数多くの医薬品会社が立ち並んでいます。享保11年(1726)に井筒屋中北伊助が創業した中北薬品(株)は、寛政年間にここに店をかまえたとのこと。また、嘉永6年(1853)にこの地で創業した(株)アラクスは京町を代表する製薬会社です。明治20年(1887)には、漢方薬にかわり、初めて舶来薬(洋薬)が販売されるようになり、大正4年(1915)に少彦名神社がつくられ、数十軒の医薬品会社と地域の人々の守り神となりました。

◆ 少彦名神社 (★ 前述)

◆ 伊勢久 (▲ 前述)

◆ 伊藤圭介出生地

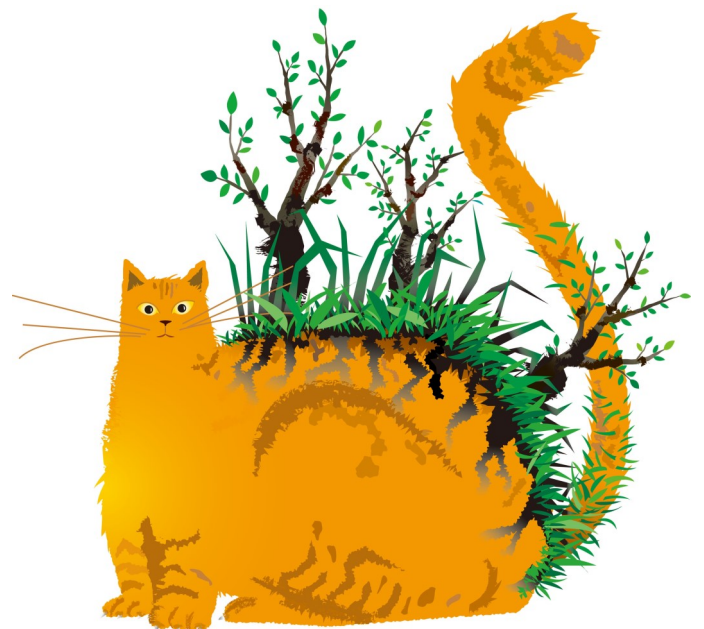
蘭方医・植物学者である伊藤圭介は、享和3年(1803)この地に生まれました。少年の頃から父兄や水谷豊文に就いて医術や本草学を学びました。文政10年(1827)には、長崎のシーボルトのもとで西洋植物学を研究し、「泰西本草名疎(たいせいほんそうめいそ)」を著しました。明治14年(1881)東京大学教授に任ぜられて植物学を講じ、明治21年我が国最初の理学博士となり、99歳の長寿を保ちました。

◆ 仮病院跡

明治4年(1871)、西洋医学の進歩を図るため、伊藤圭介らによって元名古屋藩評定所跡に公立の仮病院が設立され、医学校も併設されました。県下唯一の医療機関で人々の生活に大きく貢献した施設でしたが、廃藩置県によりいったん明治5年2月に閉院されました。翌明治6年5月、西本願寺名古屋別院の地に復興し、明治10年7月に天王崎に公立医学所として新築・移転するまで医療活動を続けました。

◆ 仮医学校跡

明治4年(1871)、西洋医学の進歩を図るため、伊藤圭介らによって元名古屋藩評定所跡に仮病院が設置されました。また病院付属の仮医学校も、元名古屋溜町方役所跡であった隣接したこの地に併設されました。これによって庶民の疾病、治療と併せて、医学生を教育する制度が整えられましたが、明治5年学制発布により廃校となりました。その後、医学講習所等を経て現在の名古屋大学医学部へと発展しました。



【問合せ】

名古屋市中区役所企画経理室

〒460-8447 名古屋市中区栄四丁目1番8号

電話052(265)2309 ファクス052(261)0535

開庁時間 月曜日～金曜日(休日・祝日・年末年始を除く)

午前8時45分～午後5時15分